

2026年度

奈良大学大学院 秋季入学試験

社会学研究科 社会学専攻
社会文化研究コース

試験問題

専 門 科 目
(社会心理学)

《注 意》

解答は、設問ごとに解答用紙を替えて記入してください。

以下の設問に答えなさい。選択式の設問については、解答した設問の番号を記した上で答えなさい。

問題1 実験法と質問紙調査法それぞれの利点と限界について説明し、それぞれの手法を用いるべき研究目的の例を挙げよ。

問題2 以下のいずれか1つについて答えなさい。

- (1) 説得による態度変容について、精緻化見込みモデル (elaboration likelihood model) の概要を説明しなさい。また、精緻化見込みモデルとヒューリスティック・システムティックモデルの違いを説明しなさい。
- (2) 集合的無知（多元的無知）が生じるメカニズムを説明し、集団や社会のルールが維持される仕組みとの関連を論じなさい。

問題3 次の用語①～⑥から3つを選び、できるだけ詳細に説明しなさい。

- ① スポットライト効果
- ② 囚人のジレンマ
- ③ 自動的過程と統制的過程
- ④ 疑似相関
- ⑤ ステレオタイプ抑制
- ⑥ システム正当化理論

【出題意図】

問題 1 では、社会心理学の研究法について、実験法と質問紙調査法の利点と限界についての知識を確認するとともに、例を挙げることによって研究目的に応じた研究法の選択ができるだけの知識を有しているかを確認することを目的とした。

問題 2 では、社会心理学において広く知られているモデルについて、表面的な知識だけでなくモデルの位置づけについても説明できる能力を測ることを目的とした。

問題 3 では、社会心理学における主要な用語について、適切な説明ができるかを問うことを目的とした。

【解答例】

問題 1 実験法と質問紙調査法の利点と限界

実験法の利点は、独立変数を操作し他の要因を統制することで、変数間の因果関係を明確に検証できる点にある。限界としては、実験室という人工的な設定のため生態学的妥当性が低く、現実場面への一般化が難しいことが挙げられる。研究目的としては、例えば「同調圧力が判断に及ぼす影響」を検証するアッシュの実験のように、特定の要因の効果を厳密に確認したい場合に適している。一方、質問紙調査法の利点は、大規模な対象者から効率的にデータを収集でき、変数間の相関関係や実態把握、一般化可能性の高い知見が得られる点にある。限界は、変数を操作しないため因果関係を断定できず、回答の社会的望ましさや自己報告の歪みの影響を受けやすいことである。研究目的としては、「学歴と幸福感の関連」のように、多数の変数間の関係性や社会全体の傾向を把握したい場合に適している。

問題 2 (1): 精緻化見込みモデルとヒューリスティック・システムティックモデルの違い

精緻化見込みモデル(ELM)は、説得的メッセージへの態度変容が 2 つの経路によって生じるとする理論である。受け手が動機づけと能力を備え、メッセージ内容を注意深く吟味できる場合には、論拠の質を精査する「中心的経路」が用いられ、態度変容は比較的安定し持続する。一方、動機や能力が乏しい場合には、送り手の魅力や専門性といった表面的手がかりに依拠する「周辺の経路」が用いられ、態度変容は一時的で変化しやすい。ヒューリスティック・システムティックモデル(HSM)も ELM と同様に、精緻な処理(システムティック処理)と簡便な処理(ヒューリスティック処理)を区別する点で共通するが、HSM では両処理が排他的ではなく同時並行的に生じうるとし、ヒューリスティックがシステムティック処理の解釈枠組みとしても機能する点が異なる。

問題 2 (2): 集合的無知(多元的無知)のメカニズムとルール維持との関連

集合的無知(多元的無知)とは、集団の多くの成員が内心では特定の規範や状況に懐疑的・否定的でありながら、他の成員は皆それを受け入れていると誤って推測し、結果として各自が本心を表明せず、表面的な同調行動をとり続ける現象である。人は自らの内的状態は把握できても他者の内面は行動から推測するしかないため、他者の外的な同調行動を額面通りに受け取り、本心とのズレに気づかない。この誤知覚が連鎖することで、実際には支持されていないルールや規範があたかも集団全体の総意であるかのように見え、誰も異議を唱えないまま維持・強化されてしまう。これは、集団や社会のルールが実質的な合意なしに存続するメカニズムの一つを説明するものであり、多元的無知の解消(事実情報の提供)が規範変化の契機となりうる。

問題 3 用語説明問題

① スポットライト効果

スポットライト効果とは、他者が自分の外見や言動、失敗などに実際以上に注目していると過大視してしまう認知的バイアスである。人は自分自身の視点を出発点として他者の注意を推測するため、自分にとって顕著な情報(緊張や服装の乱れなど)が他者にも同様に顕著であると誤って想定してしまう。実際には他者は自分自身のことに関心が向いており、本人が思うほど注目していないことが実験的に示されている。対人不安や自己意識の高まりと関連する。

② 囚人のジレンマ

囚人のジレンマは、各プレイヤーが自己利益に基づいて合理的に行動すると、双方にとって望ましくない結果に陥る社会的ジレンマの代表例である。互いに協力すれば双方にとって最良の結果が得られるにもかかわらず、相手が協力するか裏切るか分からない状況では、自分だけが裏切った場合の利得が最大となり、相手も同様に考えるため、結果的に双方が裏切りを選択してしまう。個人的合理性と集団的合理性の乖離を示すモデルとして、協力行動や社会的ジレンマ研究の基礎となっている。

③ 自動的過程と統制的過程

自動的過程とは、意図や意識、努力を伴わずに高速かつ並行的に生じる情報処理であり、ステレオタイプの活性化や瞬時の第一印象形成などが該当する。これに対し統制的過程は、意図的で意識的な注意と認知資源を要する処理であり、逐次的に進行し、動機づけや認知的余裕がある場合にのみ機能する。社会的認知の二重過程モデルでは、日常的な判断の多くは自動的過程によって効率的に処理される一方、重要な判断や動機づけが高い場面では統制的過程がそれを修正・上書きすると考えられている。

④ 疑似相関

疑似相関とは、2 つの変数の間に統計的な相関関係が見られるものの、両者の間に直接的な因果関係が存在せず、第三の変数(交絡変数)が両方に影響を及ぼすことで見かけ上の関連が生じている状態を指す。例えば、ある地域でアイスクリームの売上と水難事故の件数に正の相関が見られても、両者を直接結びつける因果関係はなく、実際には「気温の上昇」という共通の要因がそれぞれを増加させていると考えられる。相関関係のみから安易に因果関係を推論することの危険性を示す概念である。

⑤ ステレオタイプ抑制

ステレオタイプ抑制とは、ステレオタイプに基づく思考や反応を意図的に抑え込もうとする統制的過程を指す。しかし抑制の試みはしばしば逆説的皮肉過程を引き起こし、抑制対象であったステレオタイプの思考がかえって活性化しやすくなったり、抑制解除後にリバウンド的に強く表出したりすることが知られている。これは、抑制には認知資源を要するため、資源が枯渇した状況ではモニタリング機能が働かなくなることに関与すると説明される。

⑥ システム正当化理論

システム正当化理論とは、人々が既存の社会システムや制度、格差構造を、たとえそれが自らにとって不利益であっても、公正で正当なものとして認識し維持しようとする心理的傾向を説明する理論である。この動機は、自我を守る動機や集団を守る動機に加え、既存の秩序そのものを正当化しようとする動機として独立に働くと考えられる。不利な立場にある人々が現状を積極的に擁護し社会変革に消極的な現象や、格差の合理化・正当化のプロセスを説明する枠組みとして用いられている。

2026 年度

奈良大学大学院 秋季入学試験

社会学研究科 社会学専攻
社会文化研究コース

試験問題

英 語

< 注 意 >

- ① 解答は、全て解答用紙に記入すること。
- ② 英和辞典の持ち込みを認めます。ただし、電子辞書は不可。

問題 社会的認知に関する下記の英文を読み、以下の1～3の問に答えなさい。

1 : 第1段落、第2段落(9～22行目)で述べられている要素論的アプローチと全体論的アプローチの違いを説明しなさい。

2 : 第3段落、第4段落(23～46行目)で述べられている、実験心理学と社会心理学における認知の捉え方の違いを説明しなさい。

3 : 第5段落(47～56行目)で述べられている、社会的認知で扱う問題の特徴について説明しなさい。

Two general approaches to social cognition date back to early modern philosophy. The elemental approach begins with ideas as elements that become linked into increasingly complex compounds. People form associations between ideas by the ideas' repeated contiguity in space or time. Early psychologists used introspective analysis as a method to break down their memory processes into those basic elements.

Gestalt psychologists adopted a holistic approach. They focused on the mind's active construction of reality rather than on objective descriptions of the stimulus field. They also focused on the person's experience of dynamic wholes rather than elements. Lewin and Asch imported such ideas to social psychology. Asch focused on Gestalt impressions, Lewin emphasized that the perceived environment—that is, the psychological field—predicts behavior and that one must consider the entire dynamic equilibrium of forces acting on an individual. The psychological field is the joint product of person and situation, and of motivation and cognition.

Cognition has not always been prominent in experimental psychology. When introspection proved to be a weak basis for an empirical science, cognition fell into disfavor with psychologists. Behaviorists dominated psychology for decades, insisting on an observable stimulus, an observable response, and no intervening cognitions. Later, behaviorist approaches seemed inadequate to explain language; at the same time, information processing theories and computer-aided theory and technology paved the way for the reemergence of cognition in experimental psychology.

In social psychology, however, cognition has always been a respectable idea. The causes of social interaction predominantly lie in the perceived world, and the results of social interaction are thoughts as well as feelings and behavior. In addition, social psychologists have always been cognitive in their view of the thinker who reacts to the perceived stimulus and generates a substantially cognitive response. They have viewed the social thinker at some times as a consistency seeker, motivated to reduce

perceived discrepancies; at other times, they have seen the social thinker as a naïve scientist who makes every effort to ferret out the truth, with motivation contributing mainly error. Subsequently, social psychologists regarded the social thinker as a cognitive miser who attempts to increase or maintain the efficiency of capacity-limited cognitive apparatus, and they had little to say about motivation. This viewpoint was followed by a view of the social perceiver as a motivated tactician, which gained acceptance as researchers documented the flexibility of the social perceiver. Currently, with emphasis shifting to ever-faster, more immediate responses, as well as their effects on overt behavior, researchers tend to emphasize social perceivers as activated actors, heavily influenced by social environments.

Social cognition, as an area of study, emphasizes unabashed mentalism, social settings, cross-fertilization, and real-world social issues. Social cognition departs from the general principles of cognition in some ways: compared to objects, people are more likely to be causal agents, to perceive as well as being perceived, and to involve intimately the observer's self. People are difficult targets of cognition; because they adjust themselves upon being perceived, many of their important attributes (e.g., traits) must be inferred, and the accuracy of observations is difficult to determine. People frequently change and are unavoidably complex as targets of cognition. Hence those who study social cognition must adapt the ideas of cognitive psychology to suit the specific features of cognitions about people.

Source: Fiske, S. T., and Taylor, S. E. (2008). *Social Cognition: From Brains to Culture*. New York: McGraw-Hill. Pp.21-22.

英語（出題意図、解答例）

【出題意図】

大学初年次レベルの教科書に相当する英文について、その概要を読み取る能力を有しているかを問うものである。逐語訳ではなく、パラグラフリーディング（段落ごとの内容の読み取り）ができているかを確認することを意図した。

【解答例】

問 1:要素論的アプローチと全体論的アプローチの違い

要素論的アプローチは、観念を最小単位の「要素」とみなし、時間的・空間的な近接が反復されることで要素同士が結合し、複雑な観念の連合が形成されると考える立場であり、内観法によって記憶過程を基本要素へと分解しようとした。これに対し全体論的アプローチ(ゲシュタルト心理学)は、要素への還元ではなく、心が現実を能動的に構成する過程や力動的な全体としての経験を重視する。レヴィンは知覚された環境(心理的場)が行動を規定すると考え、個人と状況、動機と認知が相互作用する力の全体を捉えることを重視した。

問 2:実験心理学と社会心理学における認知の捉え方の違い

実験心理学では内観法が科学的方法として不十分とされたことから認知は一時軽視され、行動主義が観察可能な刺激と反応のみを扱い内的認知過程を排除する立場をとった。しかし言語現象の説明に行動主義が限界を示し、情報処理理論やコンピュータ技術の発達を契機に認知は再び重視されるようになった。一方、社会心理学では認知は一貫して重要視されてきた。社会的相互作用の原因は知覚された世界にあるとされ、一貫性希求者・素朴科学者・認知的倏約家・動機づけられた戦術家・活性化された行為者というように、時代ごとに人間を能動的な認知的存在として捉える見方が保持され続けてきた。

問 3:社会的認知で扱う問題の特徴

社会的認知が対象とする「人間」は、単なる物とは異なり自らも因果的動因となり、知覚すると同時に知覚される存在であるうえ、観察者自身の自己が深く関与する点に特徴がある。人間は自分が観察されていることを意識すると行動を調整するため、特性などの重要な属性は直接観察できず推論に頼らざるを得ず、その観察の正確さを確かめることも難しい。さらに人間は絶えず変化し、複雑で捉えにくい対象である。そのため社会的認知の研究者は、一般的な認知心理学の知見をそのまま適用するのではなく、人間を対象とする場合特有の性質に合わせて修正・応用する必要がある。

2026年度

奈良大学大学院 春季入学試験

社会学研究科 社会学専攻
社会文化研究コース

試験問題(社会人)

小論文
(社会学)

小論文（問題、解答例、評価のポイント）

【問題】

インターネットが出現したことで、個々人の行動はどのように変化したか。自身の経験とそれがどの程度まで一般化できるかを論じなさい。

【解答例】

私は、インターネットが出現したことで、個々人が他の人とのやり取りをしなくなり、物事を自分一人で完結させるようになったのではないかと感じている。私が社会人として働き始めたころインターネットはまだ普及しておらず、SNS も存在していなかった。電子メールがようやく仕事で使われ始めていたが、会社の中での連絡は、ほぼすべて電話と回覧状に頼っていた。とにかく会議を設定するだけで大変な手間がかかったことを記憶している。ところが社内の連絡が電子メールになると、複数の人間にいっせいに連絡を回すことができるようになり、外出していても帰社してから連絡事項をすべて確認できるようになった。海外との連絡も時差を気にせずに行えるようになった。そういった点で、仕事が効率化されたことは間違いない。

ただ、そうした中で、人を相手にしているという実感が薄くなったと思う。相手の都合を考えて取引先を訪問したり相手の顔をうかがいながら話をするということは、電子メールでは必要ない。調べものをするときも、以前は辞書や辞典が必要だったし、わからないことを隣の席の同僚に聞いたりした。インターネットが普及したことで、こうしたことは不要になった。この点、仕事をする上で他の人を必要としなくなったと感ずることができた。

最近になってサイバーカスケードやエコーチェンバーという言葉を知った。インターネットでは自分に必要な情報をアルゴリズムが選んでくれるために、自分に都合のいい情報、自分のことを肯定する情報ばかりに接するようになるという現象だという。これが、自分にはわからないことがある、自分は本当に正しいのか自信がないという感覚を失わせていくことだとすれば、私が感じていることは意外に多くの人が同じように感じているのかもしれない。そうであれば、人間同士の結びつきの弱まりは、大きな社会問題になっていくと思う。

だが同時に、それだけではないと感ずることもある。たとえば、コロナ禍が明けたとたんに、あれほど称賛されていたリモートワークを廃止する会社が続いた。リモート会議よりも会社で直接話す方が効率的という理由だという。おそらくこうした社会の動きは、簡単にまとめられるものではないのだと思う。だからこそ、こうした社会現象を学ぶことが大切だと、私は思っている。

【評価のポイント】

社会人入試なので専門的知識は問わない。本科目で問うているのは、自身の経験を学術的研究対象への関心につなげ、これを展開する能力である。

・事例となる経験の内容は問わない。ただし、第三者的な視点から、あるいは客観的な基準にしたがってこの経験を整理し、記述できるかを主に評価する。

・この経験と関連する専門知識に言及できるか。また、こうした専門知識に対して懐疑的・批判的な視点を持てるかも評価の対象となる。